

論文

和英辞典の歴史

早川 勇

日本語要旨

和英辞典は2つの大きな流れに分けることができる。1つは、日本に
来た外国人が編纂した日本語英語辞書を基礎とする系列である。これは、
ヘボン『和英語林集成』(1867)からブリנקリー・南条・岩崎『和英大
辞典』(1896)に至る流れである。ヘボンやブリנקリーは日本に長く住
み日本語に堪能であった。もう1つは、日本人自身が日本人のために編
纂した和英辞典である。こちらはさらに大きく3つに分けることができ
る。それは編纂者に共通する経歴があることによる。(1)札幌農学校の
ように徹底した英語教育体制のもとで英米人から学び、その後海外に雄
飛した人々、(2)若くして海外に渡り長期間滞在した人々、(3)日本で学
びほとんど海外での留学経験がないが並外れた読書家・勉強家であるか
英字新聞の記者であった人々である。

キーワード 和英辞典, ヘボン, ブリנקリー, 斎藤秀三郎, 武信由太郎, 竹原常太

0. 和英辞典編纂の問題点と本論文の目的

英和辞典の編纂には長い学問的な発達の歴史がある。一方、和英辞典は余り発達してい
ない。未発達の理由と関連して、和英辞典編纂の歴史を考える際に次の3点が大きな問題
のように思われる。

第1点は、日本語語彙の言語学的分析がかなり遅れていることである。それは、日本語辞典の不備に象徴される。福原麟太郎はかつてこう述べた。「和英の辞書に出る国語となると、国語そのものが整理されていないので、systemを立ててゆくという事が出来ない。」(1956, p. 128)「だから、和英辞典も、ゆきあたりばったりで、要するに、和英語彙という程度に過ぎないのが現状である。」(p. 131)

第2点は、和英辞典は真の意味で発信型であることが必須条件だという点である。英和辞典と和英辞典の仕事分担に関してはこれまで暗黙の了解があった。英和辞典は受信用で和英辞典は発信用という大まかな区別がある。しかし、多くの和英辞典の場合には厳密な意味で発信用とはいえない。というのは、訳語の羅列が多く各訳語の意味・用法上の違いを知ることが困難な場合が多いからである。このため、従来の和英辞典では引いた英語をもう一度英和辞典で引き直さなければならなかった。それを回避するためには、訳語の意味・用例だけでなく、文法・語法・日英比較・背景などについても言及する必要がある。

第3点は英語の例文を理念的にいかにかに把握するかである。英米人と同じ程度に英文を書くことができ、さらに日本語の語感に優れた編纂者が存在するのであるならば、素晴らしい和英辞典ができるにちがいない。この両面において完璧な編纂者はいない。実際にはそのどちらかに片寄っている。このためか、ヘボン以降、和英辞典の序文・前書きにおける編纂者のことばはすべて控え目で、完全なものからはほど遠いことを素直に認めることが多い。その場合、書かれる英文が多少日本的なものであってもそれを積極的に認めるのか、それを拒否しあくまで英米人が書く英文のみを完璧なものとして提示するかで辞書編纂の方法は大きく異なる。

これらの点を和英辞典を評価する基準として、その流れや系譜を明らかにするのが本論文の目的である。本論では特に第3の点とかわり編纂者の履歴を重視しそれとの関連において和英辞典の系譜を概観したい。ただし、幕末から昭和30年くらいまでの和英辞典の歴史について述べる。

1. ヘボン編『和英語林集成』(1867)

和英辞典の歴史を語るとき、ヘボン式ローマ字で知られるヘボンから始めなければならない。ヘボン(James Curtis Hepburn)は医学博士であり長老派の宣教師であった。来日までシンガポールなどで布教活動を行っていたが、当時の日本はキリスト教の布教が禁止されていた。ペリーの日本訪問以降、外国人が日本に入る状況は改善された。安政6年(1859)、ヘボンは妻とともに宣教師として神奈川に着いた。日米通商条約が締結された翌年である。神奈川では外国人が斬殺される事件が起こるなど不安定な世情であった。彼ら

和英辞典の歴史

は正規の形での布教を断念し、診療所を作り奉仕活動を展開することから始めた。しかし、時の幕府から妨害をうけ診療所は閉鎖に追い込まれた。為政者は宣教師を含めすべての外国人を横浜に移し保護監督したいと考えていた。文久2年に横浜へ移り、診療所を再開した。

宣教師たちが赴く国で何よりもまず始めることはその国の言語を学ぶことである。宣教師として、神のことばを日本人に伝えるためには日本語を習得することは不可欠である。また、聖書を日本人が読めるように翻訳しなければならない。ヘボンが日本語の研究と和英辞書の編集に取りかかった。辞書編纂の当初の目的は、キリスト教の布教が解禁されたときに来日する宣教師の布教を助け聖書翻訳のための手引とするためであった。ヘボンは書簡で「少なくとも、この辞書なしに学ぶより四分の三の労力を軽減したいのです。」と述べた。ヘボンの辞書は日本在住の英米人や来日する外国人宣教師などを対象として編纂された辞典であり、「和英辞典」と言うよりも「日英辞典」と呼ぶべきであろう。

我が国における和英辞典の歴史は、ヘボンが慶応3年(1867)に出版した『和英語林集成』の出版をもって始まる。英文の書名は *A Japanese and English Dictionary; with an English and Japanese Index* である。後半に英和辞典と呼んでもよい索引がついている。英和の部分は上海において校正を待つ時間が長かったので書き上げたといわれている。この辞書の完成への道は平坦ではなかった。ヘボンにとって参考となる文献や辞書はほとんどなかった。その序に、イエズス会宣教師が慶長8年(1603)年に出版した『日葡辞書』とメドハーストがバタビヤで天保元年(1830)に出版した『英和和英語彙集』を参照したとある。また、『大日本永代節用無尽蔵』『大全早引節用集』など江戸末期の節用集も利用した。約8年間の労苦の末に和英辞典を完成した。当時の日本には活版印刷の技術はなかったので、『和英語林集成』は上海の美華書院(American Presbyterian Mission Press)で印刷され横浜において刊行された。702頁の大冊で1,200部を限定的に出版した。

『和英語林集成』の収録語彙は、和英が20,772語で、英和が10,030語である。中心は和英で、英和は簡単な記述となっている。和英においては日本独自のことばが掲載されているのは当然のことである。「溺死人(どぜゑもん)、虚無僧(こもそう)、公事師(くじし)、御刀(みはかし)、浪人、三途川(ヘボンの片仮名書きは平仮名に直した)などである。また、自らの領域である医学や宗教の用語も多い。医学用語としては、「赤痢(あかはら)、青盲(あきめくら)、便毒、膀胱、下血(ちくだり)、肚腹(ほがみ)、決毒(ほねがらみ)、陰門、静脈、三白」などがある。宗教用語としては「末世、婆羅門、菩薩、仏生会、畜生道、法衣、法事、慈悲、成道、切支丹、浄波梨鏡、弥勒仏、霊仏」などが収録されているが、キリスト教関連の語はきわめて少ない。また、それ以外の専門分野における語はあまり見られない。それぞれの学問分野がまだ未発達であったことが大きな理由であろう。

さらに、ヘボン辞書では廃語や文語も収録した。松村明 (1980, p. 978) によると約2,700の見出語に†がついている。これは文章語または廃語を表わす記号である。「珍書, 治乱, 童稚, 瑞夢, 不当, 侍る, 辟易, 肥大, いぎたない, 一身, 時服, 柔順, 奸姪, 丈夫 (ますらお)」などである。これらを見てわかるように、このレーベル付加の基準は必ずしも明確とはいえない。このため、第3版では一部を除きほとんどこのレーベルは削除された。

各語の記述は次のような構成となっている。

BU-REI, ブレイ, 無礼, Rude, impolite, vulgar, devoid of good manners. – *wo togameru*, to censure rudeness. – *na yats da*, a vulgar fellow. Syn. Shitszei.

まず、見出語はローマ字だけでなく片仮名と漢字でも表記される。その次に意味が英語で示される。さらに、ローマ字で例文が示されその後に英文訳が提示される。最後に語彙によっては類義語が並ぶ。類義語の配置は英語の辞書としてはありふれたものであるが、日本語の辞書としてはヘボンが初めて試みたと思われる。多義語の場合には、意味を分析しそれを区別しながら提示しなければならないが、そこまでは行われていない。

『和英語林集成』における語の記述として特異な点を指摘したい。多くの語において双解方式をとっていることである。これは各語の漢字表記の後に置かれていることからわかるように、ほとんどの場合、漢語の日本語による簡単な説明でもある。例をあげよう。

Hai-gaku, ハイガク, 廃学, (*Gakumon wo yameru.*)

Hana, ハナ, 初, (*hajime*)

Hei-kō, -szru, ヘイコウ, 閉口, (*Kuchi wo tojiru.*)

Jo-gon, ジョゴン, 助言, (*taszkeru kotoba*)

Shō-rui, シヤウルイ, 生類, (*ikeru tagui*)

これらの例の()内にローマ字で表記されている日本語は基本的に和語で句による説明となっている。これは、漢語表現が完全には確立していなかった当時の言語環境を反映するものでもある。この点はこれまであまり言及されてこなかったし、これ以降の辞書においてもこの方式は採用されていないが、辞書学の観点からはきわめて重要で高い評価が与えられるべきである。

ヘボンは診療所で毎日さまざまな階層の日本人と接していたので、辞書においては彼らの使う日常的な語彙を中心に取扱ったことは想像に難くない。そのため、各語の用例にはヘボンが接した日常の日本語会話がよく現れている。日本文は原文のローマ字表記を書

和英辞典の歴史

き直した。

十日ぶりの薬を下され (give me medicine enough for ten days)
一人仕事ははかがゆかぬ (the work of one person does not accomplish much)
腹が下る (the bowels are loose)
酒はへたでござります (I am not used to *sake*)
地味の催促では取れぬ (it will not be got by moderate urging)
寿命が短い (his life was short)
年寄って背が屈まった (the back is bent with age)
医者にかかる (to consult a physician)
忙しくて行きかねる (I am so busy I cannot go)
江戸に変わった事ありますか (is there anything new in Yedo?)
医者に診てもらおう (let a doctor see it)
胸が痛い (the breast pains)

彼は例文について特別な意見をもっていたわけではないようである。単に、実用を旨として自分の回りで聞かれる日本語を英文に翻訳したいと考えただけであろう。

『和英語林集成』は刊行と同時に日本社会に快く迎えられた。この好評に答えて、明治5年(1872)に内容を大幅に増補改訂し同じく上海で印刷し横浜で刊行した。日本政府は明治7年にこの辞書を2千部買い上げた。さらに、改訂増補版である第3版は明治19年(1886)に出版された。この第3版から著作権は丸善商社に渡った。各版において日本人が編纂に協力した。初版は岸田吟香、2版は奥野昌綱、3版は高橋五郎である。さらに、第3版では丸善商社の社員として志賀重昂も校正を手伝ったといわれている。本版の普及によりローマ字が広まり、この版で使用されたローマ字が「ヘボン式ローマ字」と呼ばれ今日の日本人に親しまれている。

『和英語林集成』は版を重ねるたびに新語を増補した。松村明の調査によると、第3版の和英の語数は初版より14,800語多く、再版より12,700語多く、35,618語となった。771頁以下のPart Secondは英和で15,697語を収録している。宗教・思想・文化・科学などさまざまな分野の新語が収録された。語彙を忠実に記述しようとする客観的な態度がみられる。従って、日本の近代化、文明開化のありさまを反映した単語の集成であり、これらの版に収録された語は躍動する日本を映したものである。しかし、第3版の序文においてこう述べている。“But owing to the amazing changes and rapid advancement of the Japanese in every department, he has found it difficult to keep pace with the

corresponding advance of the language in the increase of its vocabulary.” (p. iii) 文明開化にともないすべての学問領域において新たに造られた語を取録することは不可能だと考え、次のような原則をたてた。“He has to draw a line somewhere, and has limited himself to such words only as are in popular and general use.” (p. iii) 即ち、収録語彙を一般的に用いられる語に限定した。ただし、古事記や万葉集などの古典を読む人のために古語を加えそれには^レを付した。松村明 (1980, p. 975) の研究によると、2,080語にこの印が付いているが、ほとんどが新たに付いたものである。それ以降の版について述べる。4版 [明治21年]、5版 [明治27年]、6版 [明治33年]、7版 [明治36年]、8版 [明治39年]、9版 [明治43年] である。これらは若干の訂正はあるものの基本的に第3版と同じである。

収録語彙数が増えただけではない。第3版においては特に訳語が大きく前進した。後半の英和部分で、初版において句による説明であったものが語による訳となったと、松村明 (1980, p. 978) は指摘している。例えば、Autocratの再版の訳は「一人で政(まつりごと)を行う者」であったが第3版では「専政者」となった。この辞書は日本最初の和英辞典で、その後の影響は絶大であった。そっくり転載したり、その一部を書き換えたり、簡略化したりしたものが数多く出版された。その影響は明治25年頃まで続く。また、ヘボン辞書は和独辞典、和仏辞典だけでなく、『言海』『和漢雅俗いろは辞典』などにも多大の影響を与えた。例えば、品詞表示についていえば、大槻文彦がヘボンの表示を参照したことは明らかである。

ヘボンの辞書を見る場合、上記のような語学的資料のみが強調されるが、その宗教的意味も確認すべきだというのが大島智夫 (1996) の主張である。氏は『ヘボン『和英語林集成』の背景』において、ヘボンがこの辞書を通して日本人に伝えたかったキリスト教的人間像について述べている。ヘボンの理想的人間像は生まれ育ったニューイングランドの勤勉で、隣人愛に燃え、正義のためにすすんで戦った清教徒たちである。その人生観はヘボン辞書の例文にも反映されている。氏はその例として「ひと情なく我を憎まば、我嬉しからんや、それを思うてひとを憐れみ、慈悲をなせよ。それ仁恕なり」などをあげているが、筆者が独自に採取したものをここでは示す。

この子は不精だから学問はあがりません (this child, owing to his idleness, does not learn)

一心不乱に神を拝む (to pray with the whole heart)

その身を謹み親御に孝行したまえかし (I beseech you to be watchful of yourselves, and be obedient to your parents)

人の命は極まりなし (the life of man is not fixed (to any certain time))

和英辞典の歴史

月花を愛でつつ遊ぶ世にはあらず (this is not a time to go about admiring the moon and flowers)

神はどこにでもおわします (God is in every place)

ヘボン夫妻は命をかけて日本にキリスト教を伝えようとし、私財をなげ売って明治学院を創立した。また、ヘボンは『和英語林集成』の版權を丸善に譲渡し、その代金全額を投じて「ヘボン館」と称する学生寄宿舎を建設した。夫妻はその後33年間日本において布教活動と同時に医療活動を行い、1892年にアメリカに戻った。*The Japan Mail* はこう告げている。“the beauty of his character, his untiring charity, his absolute self-negation, and his steady zeal in the cause of everything good, constitute a picture which could hardly fail to appeal to the Japanese people” その彼が1905年に天皇より叙勲を受けた。1911年9月21日に96歳で亡くなったが、ほとんど時を同じくしてヘボン館は焼失した。

2. ブリンクリー等編『和英大辞典』（1896）

ヘボン辞書の出版から約30年後の明治29年に、ブリンクリー (Francis Brinkley)・南条文雄・岩崎行親編の『和英大辞典』 (*An Unabridged Japanese-English Dictionary*) が出版された。この辞書によりヘボンも廃れるといわれたが、ヘボン辞書は明治43年に至っても出版されていた。

編纂者のブリンクリーは1841年にアイルランドのレンスター (Leinster Province) の名門に生まれた。ダブリン大学で学び、数学と古典学において主席で卒業した。その後、陸軍に入り、ロンドン郊外にある英国陸軍砲兵学校 (The Royal Military Academy) で砲術を学んだ。慶応3年 (1867) に、英国公使付きの武官として来日した。日本の風物に魅せられ日本人に愛着を感じ、日本語を熱心に学んだ。漢字も読み書きできるほど日本語に堪能になったという。日本滞在は数カ月のつもりであったが、約45年間日本に滞在した。海軍砲術学校教頭、工部大学校 (東京大学工学部の前身) 教師を歴任した。また、明治14年には横浜の英字新聞 *The Japan Mail* を買収し主筆となった。30年余にわたり、日本擁護の立場で日本文化や日本事情を紹介した。このため、「御用新聞」との陰口をたたかれた。また、当時の日本外務省の書類の英訳はほとんど彼が担当したといわれる。

久しぶりの本格的な和英辞典の誕生である。本書はヘボン辞書の3倍近い1,687頁の大著である。23頁の「序」では、日本語語彙の構造、文字の種類、発音とアクセント、日本語文法などが詳細に英語で述べられている。本来の対象読者はヘボンの辞書と同じように日本語を学ぶ外国人だからである。従って、内容的には現代の和英辞典と趣が異なるが、

日本人も利用した。この『和英大辞典』は明治30年代の和英辞典としては恐らく最も広く利用されたものであろう。しかしながら、その歴史的評価は余り高くない。おそらく、辞書項目のたて方や記述の方法などがヘボン方式を踏襲したからであろう。2例を示す。

- ブリックリー辞書 **Konomi**, このみ, 木実, 果, *n.* Fruit of a tree; nuts; berries.
Syn. Ki no mi, Kudamono.
Kono-tabi, このたび, 今度, 今回, *adv.* This time, the present occasion. Syn. Ima no toki.
- ヘボン辞書 (初版) **Konomi**, コノミ, 木実, *n.* Fruit of a tree.
Kono-tabi, コノタビ, 此度, *adv.* This time. Syn. Kondo.

これにより『和英大辞典』の評価を極端に下げるべきではない。また、この辞書はヘボン辞書からの借用や書換が目立つという見方もあるが、筆者の調査ではそれほど多くない。

この辞書の特徴をヘボンと比較しながら列記したい。

- 科学, 専門用語の訳を専門家に依頼した。内題には箕作佳吉動物学語担任・松村任三植物学語担任とある。このため, 専門語はヘボン辞書に比べて大幅に増えた。「血税」(*lit.*)「血痰」(*Med.*)「海馬」(*Zoöl.*)「網膜」(*Med.*)「自動詞」(*Gram.*)「予審」(*Law*)などで, 多くの語に領域レーベルがついていることにも注目したい。
- 文体に関するレーベルもいくつかある。そのなかでよくみられるのが (*coll.*) である。口語であることを示すものである。「あっち」「べんちゃら」「だだる」「ひっぱたく」「よしんば」などの語についている。
- 本辞書には至るところに (*Chin.*) という略号がみられる。これは「漢語」であることを示すものである。日本人ならば, ある語が漢語かどうかの判断はそれほど難しいものではないが, 外国人には困難である。そのためにこの記号をつけたのであろう。
- かなり多くの語に類義語が示されている。例えば, Araarash, -i, -ki の見出語の最後に Syn. があり, その後に Futoki, Hageshiki, Takeshiki などの類義語が列記されている。ヘボン辞書にもこれはあるが, より充実させた。
- 用例は当時の口語日本語を反映し, ほとんどが短い。語によっては多くの用例を列挙している。「Ki 気」の後には「人ノ気ニ入ル」(to be liked)「気が利カヌ」(to be dull-witted)「気が遠クナル」(to become unconscious)「気ニナル」(to be anxious or concerned) など65余の例が掲載されている。「Kaku かく」では1から6まで意味が示され, その下に10の短い用例があがっている。
- 用例の日本語は, ローマ字のほかに漢字・仮名でも表記されている。ヘボン辞書ではロー

マ字表記のみである。(例) *Aku ni fukeru*, 悪ニ耽ケル, to become malignant more and more

- 日本の事物を英語で詳しく説明している。いくつかの例を示そう。「もうす, 僧帽」は ‘A head-gear worn by Buddhist priests.’ 「こむそう, 虚無僧」は ‘A samurai disposed of his estate for some political offence, or dismissed from his service, who travels about in the guise of a begging minstrel. He usually wears a deep rush hat to conceal his face.’ とかなり長い説明をしている。「はかま, 袴」「かりぎぬ, 狩衣」「きうえん, 久淵」「すべむつ, 皇親」などにも同様の説明がみられる。
- ヘボン辞書とちがいで、挿絵が掲載されている。数はそれほど多くないが、動植物や日本特有の事物を指すものである。上の「虚無僧」についても挿絵がついている。

ヘボンの辞書は古くなったのでブリンクリーは自分の辞書を新しい時代にあうものにした。しかし、語義の記述方法はヘボンと基本的に同じものにした。これは、ヘボン辞書利用者への配慮であったかもしれない。また、日本に関する情報（歴史的なものも含め）を大幅に拡大した。その結果、次のように版を重ねた。初版 [明治29年], 3版 [明治30年], 6版 [明治33年], 8版 [明治35年], 10版 [明治37年], 12版 [明治40年], 13版 [大正3年] である。明治の末に井上十吉『新訳 和英辞典』など日本人が編纂した日本人のための和英辞典が何点か出版され、ブリンクリーらの辞書は利用されなくなった。総体としてこの辞書をみるならば、ヘボンの辞書をはるかに越える内容であることは明らかである。再評価が必要である。この辞書は、むしろアメリカにおいて評価が高いかもしれない。というのは、この辞書は日本の事物を英語で詳しく説明していることもあり、1963年にアメリカにおいてリプリント版が出版されたからである。

ブリンクリーは知日家・親日家として一生を通した。37歳の時に、水戸藩士の娘田中安子と結婚した。しかし、当時のイギリスの法律では人種の異なる日本人との婚姻は認められなかった。彼は憤慨し、膨大な私費を投じて英国法院に訴え新しい判例を勝ち取った。大正元年（1912）、麻布広尾町の自邸で亡くなった。

3. 札幌農学校卒業生の編纂した和英辞典

札幌農学校のカリキュラムはクラークのいたマサチューセッツ農科大学と同じ理念で作られた。当時の自然科学系高等教育機関である駒場農学校（東京大学農学部の前身）や工部大学校（東京大学工学部の前身）と違い、英語の比重が大きかった。札幌農学校では全学年あわせて週当たり63時間であるが、英語や英文学関係の科目は何と31時間で約半数をしめていた。また、英語によるディベートの科目も含まれていた。もちろん、外国人教

師の講義はすべて英語で行なわれた。その結果、内村鑑三、新渡部稲造らの英語に堪能な学者や文化人を生み出した。それらの人々が編纂した辞書が英和だけでなく和英辞典であったということはきわめて示唆的である。農学校における英語教育がどれだけ徹底したもので、結果として学生が発信型の英語力を身につけたことがわかる。ここでは特に和英辞典編纂と係わった人々を列記したい。

新渡部稲造は文久2年(1862)に南部藩の盛岡で武士の家に生まれた。明治10年に札幌農学校に入学した。同16年には東京帝国大学に入学したが在学半ばにしてアメリカへ留学、ジョン・ホプキンス大学に入学した。さらに、明治20年にはドイツへも留学し農政学などを学んだ。彼の英語力については『英語達人列伝』(斎藤兆史2000)が伝えている。そのなかに彼の読書量に関する逸話がある。新渡部は「農学校の図書館にある書物は片はしから総て読んではうと云ふ、無謀な大野心を起し」(p. 62)とある。英書も含めすべての本を読もうと考えたというのである。「新渡部の英語がもつとも実務的な力を発揮したのは、彼が国際連盟事務局次長を務めた一九二〇年代前半である。それは彼が、あまり演説の得意でなかった英国人事務総長ドラモンド卿の代わりに欧州各国を回って国連精神普及の講演を行っていた時代、そして現在のユネスコの基礎となった国際知的協力委員会を組織し、バルクソン、アインシュタイン、キュリー夫人、ギルバート・マレーらと議論を戦わしていた時代だ。」(同書p. 22)その後、新渡部稲造は、第一高等学校教授、同校長、東京帝国大学教授などを務め、大正7年(1918)東京女子大学初代学長に就任した。

新渡部稲造は高楠順次郎と共編で『新式 日英辞典』を明治38年(1905)に三省堂から刊行した。日本語はローマ字表記でABC順に並べられた。わずかだが挿絵もある。英語にはアクセントをつけ、誤り易い語にはウェブスター式の発音表記も行った。実質的には入江祝衛が編纂したと言われている。それにしても、編纂者としてすべてに目を通していろいろな意見を述べたにちがいない。この辞書の縮約版の『袖珍新式 日英辞典』も同じ年に出た。小型で50銭で売られた。後者はポケット辞書でありながら、「破傷風、避病院、百日紅、皇霊祭、葉玉、直衣、錫杖」など専門的な語も多く収録されていて、レベルもかなり高い辞書だといえる。この2つの辞書は系統的には、ヘボンからプリンクレーに至る流れに含めるのが適切かもしれない。その証拠に書名も「和英」とせず「日英」としているが、本論では別系列として扱う。

志賀重昂(しがしげたか)は文久3年(1863)愛知県の岡崎市に生まれ、明治17年に札幌農学校を卒業した。志賀はクラークやその影響を受けた1・2期生のキリスト教的雰囲気には反発したが、彼の実用主義には忠実であった。卒業後、長野中学校へ植物学教師として赴任したが、免職となり上京し丸善に勤めた。ここでヘボンの『和英語林集成』の校正に従事した。明治19年出版の第3版だと推測される。その後、彼は世界的な地理学者と

和英辞典の歴史

して知られるようになり、さらに政治家・ジャーナリストとしても活躍した。

岩崎行親（いわさきゆきちか）は安政2年（1855）生まれで昭和3年（1928）に亡くなった。香川県出身で、20歳の時に東京英語学校に学び、後に札幌農学校に入学し一時クラークに学んだ。卒業後は北海道、東京で官吏となった。明治27年（1894）、鹿児島尋常中学校の開校と同時に教頭として赴任し次いで校長となった。その間に、明治29年、イギリスへの長い留学経験をもつ南条文雄らとともにブリנקリーを助け『和英大辞典』を編纂出版した。岩崎は明治34年に第七高等学校（現鹿児島大学）の造士館を創設し初代館長となった。その間、教授陣の充実と質実剛健の気風を作り上げ幾多の人材を育てあげた。

佐久間信恭は文久元年（1861）に生まれ、横浜に出てブラウンから英語の指導を受けた。第五高等学校英語科主任教授であった時に赴任して来たのが夏目漱石である。彼は第五高等学校英語科の教授として比較的平穏な学究生活を送った。広瀬雄と共編で『和英大辞林』（明治42年。郁文舎、iv + 1,752頁）を執筆した。英文タイトルは *A Standard Japanese-English Dictionary* で、2円50銭で売られた。前作『会話作文和英中辞林』（明治37年、郁文舎、iv + 1,180頁）の実質的な改訂版である。ABC順で多数の例文を掲載する。

武信由太郎も札幌農学校の卒業であるが、和英辞書史において最も重要な人物なので下に項を設けて詳しく述べる。

4. 明治末期から大正時代の和英辞典

明治40年（1907）に山口造酒・入江祝衛共編『註解 和英新辞典』、入江祝衛編『詳解 和英新辞典』が、明治42年に井上十吉編『新訳 和英辞典』が刊行された。これらは日本人の手になる日本人のための和英辞典で、ヘボンやブリנקリーの辞書から脱した辞典である。これらの辞書は語義の分け方や訳語の並べ方など今日の和英辞典からすると不十分な点も多いが、その以降の和英辞典における表記法の原型を提示した。

井上は外務省で翻訳などの仕事していた。それと平行して辞書を執筆し2年間で『新訳 和英辞典』を完成させた。この和英辞典は中等学校の生徒を念頭において編纂されたものである。そこでは例として完全な文をそれぞれの項目の最後にまとめ、左に日本文を右に英文を配した。典型的な例を1つ示したい。

Kuppuku (屈服), *n.* Submission; surrender; yielding. — *-suru, v.* To surrender; submit; yield.

道理には屈服せざるを得ない。 We cannot but submit to reason.

この方式は武信の和英辞典においても踏襲された。

この辞書では列挙された英語語彙が難しい場合にはその解説を()内に日本語で挿入している。英和辞典で引き直す必要もないので、学生用の辞書としては適切な配慮である。

Aimai (曖昧), *a.* Ambiguous (意味又品質にいふ); vague (漠然たる); untrustworthy (信頼せられぬ); suspicious (怪やしい); double-minded (心の定らざる).

()内の日本語解説は時に類義語の差異を示すものになっていることもある。

Hos-suru (欲する), *vi.* To desire; wish (前者より強意); want (特に要求); will; would; intend (決意).

また、見出語の意味の違いを番号によって分け、さらに[]内に意味の違いを略記した。ただし、番号づけはないがこの方式はすでに『註解 和英新辞典』にもみられる。これも武信の和英辞典において踏襲された。

Nomu (飲む, 呑む), *vt.* ① [飲む] To drink; take. ② [丸呑み] To swallow. ③ [身辺を隠す] To conceal. ④ [蔑視する] To despise; make slight of.

井上十吉は和英大辞典の仕事に取り掛かった。1年半余りして、その作業が遅々として進まないことに思いを馳せ、外務省の職を辞し辞書編纂に専念した。さらに3年をかけ、大正10年(1921)に『井上和英大辞典』を世に送った。凡例で収録語彙について述べている。「語辞の選択は主として現代使用の見地に立ち、広く一般に蒐収せる外、特に英語学習者の慣習及び利便に注意して特殊辞書の目的に合致せんことを期したり。」語義や用例の提示法は前作と基本的に同じであるが、大辞典になり収録語彙や用例の数は圧倒的に増えた。このため、『井上和英大辞典』の紙面においては専門の領域を表わすレーベルが至る所に目につく。【動】【音】【建】【史】など一般的なものだけでなく【染】(染色)【腔腸】(腔腸動物)【生】(生理)なども含まれる。このことは井上が積極的に専門語を収録したことを暗示する。名詞が増えただけではない。「いかほど、いかにも、じっと、きっちり、きわめて」などの副詞はすでに収録されていたが、新たに「ほっと、いいなりに、じろじろ、からくも、〜かしら、きなきな、きりきり」の副詞などが増えたことは特筆に値する。

5. 武信由太郎編『武信和英大辞典』（1918）

武信由太郎は文久3年（1863）、鳥取県の農家の長男として生まれた。明治9年（1876）、師と仰ぐ山田季治が名古屋の官立英語学校に転出すると、友人5人とともにその学校に入学したという。同校卒業後、札幌農学校の第4期生となった。武信はキリスト教精神や欧米の自由主義や寛容の精神をここで体得しただけでなく、卓越した英語力を身につけた。卒業後、彼は英語教員として長野県立中学校飯田支校に赴任した。そこを辞め人生の針路を転換し、英字新聞の記者となった。横浜英字新聞社などを経て *Japan Times* の創刊に参画した。自らも記者として永く英文を書いた。その後は再び教壇に戻り、東京高等師範学校教諭や早稲田大学教授を勤めた。武信は明治34年（1901）に『英語青年』という週刊（現在は月刊）の雑誌の編集者となった。

そこで、彼は和英辞典の編纂を考えるようになった。彼は従来の和英辞典における欠点を次のように考えていた。語彙が貧弱である。特に、専門語・新造語などは不備が多く利用に堪えない。系統的分類が行われていない。解釈が不親切で不徹底である。例解は不備があり要をえてない。訳文は堅く日本語の臭いが抜け切らない。これらの欠点を補うべく辞書編纂を試みた。当初は一人で一カ月で仕上げるつもりであったと序文で述べている。1ヶ月の休暇のあいだにHの初めまで書いたというから驚きである。「私は武信氏の大胆さと精力絶倫に目を見はるのである。当時、氏は三十三、四歳の血気盛んな頃であったにしても、辞書編纂という大事業を独力で着手した勇氣に感服する。また、これは勝俣先生から直接聞いたことだが、武信氏は文字通り博覧強記の人で、カード作りなどせず、記憶にたよってどしどし執筆されたそうである。それにしても、このスピードはとても常人の及ぶところではない。」（羽柴正市 1968, p. 237）結局、20年余りかけて時には20名余りでチームを組み編纂の作業を行った。大正7年（1918）、当時としては我が国最大の『武信和英大辞典』（研究社）が誕生した。2,504頁でクロース装のものは3円50銭で、総革装は4円50銭であった。

武信由太郎はその英文序言において和英辞典編纂の難しさについてこう述べている。

After all, unlike the English-Japanese dictionary, anything like completion, still less completion, is almost unthinkable for the Japanese-English dictionary, so that it is only by the painstaking efforts of successive compilers that the work can be pushed on toward the goal of perfection. If this humble publication serves to advance that great aim even one step further, then its appearance, with all its faults, may, I think, be justified.

各見出語の構成を具体的にみたい。発音表記は省略しアクセントのみ記す。

furikakaru (降懸る) *v.* Fall on; befall'; overhang' (禍など). ¶仮令如何なる事が身に降懸らうとも *whatever may happen.*

君の身に大難が降懸つてゐる。 A great danger hangs over you.

この構成は基本的に井上和英辞典の方式を踏襲している。特に、例文の位置に注目したい。短い句表現は追い込みで最後に置かれている。その下に行を改め、フルセンテンスの例文が提示される。左が日本語で、右が英文である。

この和英辞典の売れ行きはすさまじかった。「大正七年九月二十五日から翌年六月十五日までの約二百六十日間に二十六版、すなわち平均十日に一版出たことになる。」(羽柴 1968, p. 241) この流れを継承するのが『研究社和英大辞典』(昭和6年)である。この辞書も武信が編集主幹となっているが、彼は出版の前年に亡くなった。このため、研究社社長が刊行の辞を書き、まったく新しい辞書であることを宣言した。「斯くて本大辞典は自ら前「武信大和英」と相通ずる所がありますが、而も之れは改訂に非ずして全然出発を新たにせる編纂に成るものであります。」確かに、両者の構成や語義の説明などを比較すると類似の点は多いが、個々の語における記述を細部にわたって比較するならば両者の違いは歴然としている。語義の細分化や用例の豊富さは前者をはるかに凌駕するものである。

『研究社和英大辞典』の最大特徴は、豊富な熟語や文例において正しい King's English を心掛けたことである。この完璧を期すために、英国大使館商務参事官で日本語文法の著者でもあったサンソム(G. B. Sansom)の協力を得た。「斯くてこそ本書は真に本格的英文に充実した最初の大和英辞典として江湖に見え得たのであります。」また、新時代の語も可能な限り収録した。各項目中の配列や分類をつとめて自然なものにした。検索を簡便にした。

この後継辞書は今日もなお和英辞典としては最大の語彙数で最高のものだと考えられている。『研究社新和英大辞典』(1931)は、1949年に増補され実質上の第2版が刊行された。さらに、第3版は1954年に出た。この版は勝俣銓吉郎が編集主幹となった。彼はミッションスクール横浜英和学校で英語を学び始め、国民英学会を7カ月で卒業した。正規の高等教育を受けていない。その後、*Japan Times* 社で4年間英文ライターとして働いた。のちに早稲田大学の教授にまで上り詰めたが、海外に行った経験はない。

『研究社新和英大辞典』の第4版は1974年に編集主幹増田綱のもと刊行された。この版では何と29万項目となった。内訳は見出語が8万で、合成語や区表現16万、例文が5万である。さらに、第5版が2003年に出版され、総収録項目はさらに増え48万となった。内訳は見出語が13万で、複合語10万、例文が25万である。すでに1931年版がそうであつ

たように、大辞典の編纂は和英においても一人で完成できるものではなくなった。大辞典の編纂はチームを組んで行われるようになった。出版社としては編纂のチームをいかに組むかが一番のポイントであった。このため、斎藤や竹原の和英辞典のように個性的な辞書は生まれなくなった。

6. 竹原常太編『スタンダード和英大辞典』（1924）

和英辞典の編纂において最も困難な点は、例文の作成である。編纂者が英文を書かなければならない。ヘボンやブリンクリーが書いた英文は正しいし、元の日本語にも近いにちがいない。しかし、日本人が書くとなると問題が起こる。英語として正しいとしても、日本人臭さがでてしまう。そこで、斎藤秀三郎のようにそれでこそ日本人の英語だと開き直るのも1つの手であるが、その点を理念的にどう考えるかで和英辞典の編纂方法は大きく変わる。この点において竹原常太の『スタンダード和英大辞典』（宝文館、大正13年）は新しい考えを提起したが、和英辞典における日本語や英語の提示などの面においては新しいものはない。

mikka (三日) *n.* three days; the third day (三日目) ★三日にあけず *at very frequent intervals.* -三日坊主 a sticker at nothing. -三日天下 short-lived rule.

三日坊主だ He sticks at nothing. -*Health.*

竹原常太は、明治12年(1879)年9月2日、岡山県に生まれた。明治31年に神戸市立乾行義塾普通科第4学年を修了し、翌年、20歳でアメリカに渡った。イリノイ州グリヤーカレッジ師範科を卒業し明治38年に帰国した。25歳であった。その後、私立正則中学校英語科教員をかわきりに英語教師の道を歩んだ。しかし、明治43年再び渡米した。大正4年にはニューヨーク大学大学院英文科を修了しPh.D.を取得し、大正5年に帰国した。その後は、神戸高等商業学校で退官まで英語を教えた。昭和22年、67歳で亡くなった。

『スタンダード和英大辞典』は和英辞典史において特異な位置を占め、和英辞典の新時代を画した。それは、例文に対する独自の考えを打ち出したからである。「過去十数年間に於て「日本人英語」が其滑稽趣味を以て如何に英米の読書界を賑はしたかは、到底日本人の想像も及ばぬ処である。」(「スタンダード和英大辞典の編纂に就て」増補版p. 1678)そこで、日本式の英語を排し、日本の事柄を純粋な英語で表現することをその編纂方針としたのである。“I thought that the best way to avoid these errors inherent in the prevailing system of compilation was to collect as many passages as possible from current English, the

living English of to-day, making them illustrative of the various idiomatic phrases — the chief stumbling-block to the Japanese student of English.” (p. i) さらにこう述べている。「而して Japanese English の駆逐の目的は正確にして権威ある模範文例を多く示すことによりてのみ達することが出来るのである。」 (pp. 1704-5) そのためあらゆる英米の新聞雑誌その他の文献から集めた 30 万以上の引用文が、この辞典の中核となっている。

文例が権威あるものであることを示すためにその出典を一々示した。これはジョンソン辞書に範をとったと述べている。この大辞典の巻末で、竹原は武信や井上などの和英大辞典から例を引いて丹念に比較し、それらが日本人英語であり、誤訳であり、慣用を無視していると非難し、竹原和英の例文が正しいと主張している。例えば、「模擬店」をそれまでは an imitation shop とし文例を示さなかったが、竹原和英では a refreshment booth とし雑誌の文を例示した。この辞書は巻末に 2 つの附録がつく。1 つは代表的な名詞や動詞や形容詞の後にどのような前置詞がくるかがわかるもので、もう 1 つは主に名詞の前にどのような前置詞が置かれるかがわかるものである。両方とも見出語は英語でアルファベット順に配列されている。これは前置詞を核とした連語を問題とするもので発信型の和英辞典としては重要である。本辞書は高い評価を得て、その後長い人気と熱烈な信奉者を作った。さらに、コンサイス型の『スタンダード和英辞典』が 1941 年に大修館書店より出版された。これは 1963 年までに 13 版を出した。

7. 斎藤秀三郎編『斎藤和英大辞典』(1928)

慶応 2 年 (1866)、斎藤秀三郎は仙台藩士斎藤永頼の長男として生まれた。6 歳で仙台藩英語学校辛未館に入り、7 歳の時に文部省公布によって設立されたばかりの宮城英語学校に入学した。この学校では授業は主に外国人教師によって英語で行なわれた。特に米国人教師 C. L. グールドは斎藤に英語の基礎を教授した。明治 12 年に上京し、東京大学予備門 (第一高等学校の前身) を経て、翌年には工部大学校 (東京大学工学部の前身) に入り自然科学、純粋化学、造船学などを学んだ。そこで斎藤が一生の敬愛を捧げることになるブリックリー数学教授と出会った。同教授はアイルランド出身で、慶応 3 年 (1867) に英国陸軍士官の身分で来日した人物であることはすでに述べた。また、終生傾倒することとなったディクソン (James M. Dixon) 教授から英語を伝授された。ディクソンはスコットランド生まれのイギリス人で、明治 12 年 (1879) に来日し、のちに夏目漱石、岡倉由三郎らを教えた。また、彼は英語熟語辞典の編纂者として知られ、斎藤の熟語や連語に対する考えを深めた。

斎藤は卒業間際に放校処分となる。明治 17 年 (1884) 斎藤は郷里に戻り、翌年秋に私塾

和英辞典の歴史

仙台英語学校を開校した。まだ19歳であった。明治20年4月に仙台に第二高等中学校が創設され、斎藤は同校助教授に就任し、翌年には教授となった。しかし、秋には辞職した。翌年11月、前島とらと結婚し、12月には岐阜中学校へ赴任した。この地で斎藤はカーライル、エマソン、アーノルド、ゲーテらの著作を読破した。岐阜・長崎・名古屋の中学校を点々とした。頑固な性格が災いし長続きしなかった。名古屋第一中学校時代に学習院教授であった村田祐治と知り合い、その推薦で第一高等学校教授に就任した。明治29年には、一読すれば意味が理解できる英語を会得することを目指した「正則英語学校」を創設し校長となった。翌年、一高を辞職し、もっぱら正則英語学校で後進の指導にあたった。この学校経営と授業に忙殺されながら、昭和4年64歳で亡くなるまでに『実用英文典』『前置詞大全』『熟語本位 英和中辞典』など多数の教科書・辞書を江湖に送った。

斎藤秀三郎は時間をきりつめ、一人で編集し、校正し、昭和3年(1928)に『斎藤大和英辞典』を出版した。これは見出語5万で例文12万を収録し、4,640頁という膨大な辞書である。序文では「英和辞典は既存の表現の説明であり既存の表現には限度があるが、和英辞典は新しい表現の創造であるから無限に近い」と述べている。また、斎藤は「日本人の英語はある意味で日本化されなくてはならない」(The English of the Japanese must, in a certain sense, be Japanized.)という信念をもっていた。斎藤は「英米人の文章の引用は、和英辞典にはのせるべきではない」と述べ、竹原常太の『スタンダード和英大辞典』と対峙することを表明した。

『斎藤大和英辞典』は個性豊かな和英辞典で、彼の主観や嗜好を取り入れ、和歌、俳句、漢詩、俗語などの英訳が多数収録されている。Au(逢ふ)[他動]には都々逸の英訳が見られる。

逢うて嬉しや	What a joy it is to meet!
別れの辛さ	How hard is to part!
逢うて別れが	Would that we could ever meet,
無けりゃ好い	Never, never to part!

また、彼の性格を垣間見ることができる例文も多い。

博士の学位も当節は有難みが無くなった。

The title of doctor is quite cheap nowadays.

一旦云ひ出したら後へは退かぬ質だ。

He never swerves from his resolutions.

あの人に賞められると後が怖い (何か思はくがある)。

When he praises you, he has some end in view — “an axe to grind.”
文事ある者は必ず武備あり。

He who is versed in letters, is always skilled in the use of arms.
中学校の英語は程度が低い。

The English of the middle school is of a low standard.
彼は英語が出来るつて威張つて居るから可笑しい。

He prides himself on his English.
幾ら天才が有つても怠ける埋合はせにはならぬ。

No genius can compensate for idleness.

このような際物的な例文だけを紹介し、この辞書を評価するのは正しくない。この辞書には訳語の意味・用例だけでなく、本論文の最初に述べた発信型の辞典として必要な条件となるべき文法・語法・日英比較・背景などについての言及が至るところにみられる。それらについて述べたい。

- ・ 一般的には英和辞典にあるような英語語彙の説明も時には加えた。例えば「(英国にて法律事務所を持つて訴訟代理を引受ける代務弁護士, 法務弁護士) an attorney」などである。
- ・ 文法的な説明も随所に加えた。「It is a national holiday to-morrow — (副詞, 名詞に用ふれば) — To-morrow is a holiday.」 Even the very gods themselves cry over it. の表現を取り上げ「強声の形容詞, 最上級の形容詞には此“even”を略すを常とす」と注を加えた。
- ・ 日英比較に基づく表現の違いを的確に述べている。日本人は「遊ぶ」とあるとすべて play という動詞を用いることができるかと思っているがそうではない場面はたくさんある。このため「[注意] 下のごとき場合の外は“playing”と云はず。」と注意書きをしている。
- ・ 語と語のつながりにも細心の気配りをしている。「営む」の英訳として列記されている語の後の () に注目したい。To work at (one’s trade); to attend to (one’s business); to follow (a profession); to pursue (a catalog); to carry on (business); to ply (a trade); to run (a hotel); to conduct (a school); to practise (law); to profess (medicine); to perform (a religious service).
- ・ 英語表現の観点における差異について言及している。例をあげよう。「親は有難い」を英訳する場合, We are grateful to our parents. を主観的とし Our parents deserve our

gratitude. を客観的だと説明している。また、「外国」を英語にするのに「A foreign country: (詩歌にては) a foreign land: (集合的に云えば) foreign parts: (詩歌にては) foreign strands」と使い分けを示唆した。次の例では2つの英文を示しているが、文脈によって選択することを想定しているにちがいない。Diligence is everything. Everything depends on industry.

- ・ 英語表現において交換可能な語句を明示している。「人を茶にする」を英語にする場合にいろいろな動詞表現が用いられる。to chaff—banter—rally—make fun of— a person などである。
- ・ 文章構成や段落を念頭においた説明もみられる。「後」の項に次のような説明がみられる。「Past: (the former—に対し) the latter, a later: (the first—に対し) the last, the next: (this, these, that, those—に対し) the other, the remaining.」
- ・ 一般的な表現からはずれるものを「特例」として示し、英語表現の幅を大きく広げている。例えば、「黙る」の見出語のもとで「特例」として「其名を聞けば泣く子も黙る The nurse stills her child with the terrors of his name.」などを掲載している。

これらの項目は体系化されていない。記述はばらばらである。記述が統一され、上記の点がそれぞれ和訳辞典における辞書情報項目のレベルにまで高められたならば、この辞書は辞書学的にも傑作だと称することができるだろう。

斎藤秀三郎にとって、英語の勉強や研究は「道」の領域にまで達していたといわれる。斎藤は「斯の道の為に、斯の言葉のために、何人かその全力を尽くさざる」と言って、その全人生を英学に捧げた。このような教師の生き方に多くの教え子が大きな影響を受けた。彼の門下から多くの才能が育った。

8. 結論

和英辞典の歴史を概観し気づく点がある。それは編纂者に共通するタイプがあることである。次の4つに分けられる。(1) ヘボンやブリンクリーのように海外から来た外国人で、なおかつ日本に長く住み日本語に堪能であった人々、(2) 札幌農学校のように徹底した英語教育体制のもとで英米人から学び、その後海外に雄飛した人々、(3) 若くして海外に渡り長期間滞在した人々である。井上十吉は12歳でイギリスに渡り何と10年間学んだ。帰国後は外務省の翻訳官や書記官を勤めた。辞書を編纂するに際して日本語に問題があるといわれた。神田乃武も14歳の時から約9年間アメリカで学んだ。帰国直後は家族と話すのに通訳が必要だったという逸話が残っている。その後、東京帝国大学教授を経て、東京外国語学校初代校長となり、貴族院議員を歴任した。彼はイーストレーキと共編で『和訳

袖珍『新字彙』を明治24年に出版した。竹原常太もここに位置づけてもよからう。明治32年～38年、明治43年～大正5年の2度にわたり計10年余りアメリカで学んだ。その間、大学での学問と同時に、辞書編纂のため資料蒐集に時間を費やした。(4) 最後は、日本で学びほとんど海外での留学経験がない人々であるが、並外れた読書家・勉強家であるか英字新聞の記者であったりする場合である。斎藤秀三郎も勝俣銓吉郎も日本を出たことはない。武信由太郎と勝俣銓吉郎は英字新聞の記者であった。そういえば内村鑑三も少しのあいだ英字新聞の記者を勤めていた。

上記のような和英辞典編纂者の履歴も考慮に入れながら、和英辞典の系譜をまとめたい。

- A. ヘボン『和英語林集成』(1867)→再版(1872)→第3版(1886)
ブリンクリー・南条・岩崎『和英大辞典』(1896)
- B. 新渡部・高楠『新式日英辞典』『袖珍新式日英辞典』(1905)
佐久間『会話作文和英中辞典』(1904)→佐久間・広瀬『和英大辞林』(1909)
- C. 井上『新訳和英辞典』(1909)→『井上和英大辞典』(1921)
竹原『スタンダード和英大辞典』(1924)→『スタンダード和英辞典』(1941)
- D. 斎藤『和英大辞典』(1928)
武信『武信和英大辞典』(1918)→『研究社新和英大辞典』(1931)→増補版(1949)→勝俣・第3版(1954)

参 考 文 献

- 大島智夫『ヘボン『和英語林集成』の背景』明治学院大学キリスト教研究所, 1996.
- 小沢準作「語学一辞書(二)和英辞書」『日本の英学百年 昭和』1968, pp. 287-298.
- 斎藤兆史『英語達人列伝』中公新書, 2000.
- 出来成訓「英学者勝俣銓吉郎」『英学史研究』第9号(1976) pp. 155-163.
- 羽柴正市「語学一英語辞書(二)武信『和英』」『日本の英学百年 大正』1968, pp. 234-242.
- 飛田良文「『和英語林集成』の著者J. C. ヘボン」『ヘボン著『和英語林集成』初版・再版・三版対照総索引』第3巻, 港の人, 2001, pp. 501-525.
- 福原麟太郎「英語辞書の話」『新英語教育講座』第6巻, 研究社, 1956, pp. 103-156.
- 町田俊昭「語学一英語辞書の発達(二)和英辞書」『日本の英学百年 明治』1968, pp. 305-321.
- 町田俊昭「語学一英語辞書(一)井上『英和』『和英』」『日本の英学百年 大正』1968, pp. 220-234.
- 松村 明「解説」ヘボン『和英語林集成』講談社, 1980.
- 山岸勝栄『学習和英辞典編纂論とその実践』こびあん書房, 2001.